

---

# 余計なお世話とスペックオーバー

春谷公彦

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

余計なお世話とスペックオーバー

### 【Zコード】

Z0499Z

### 【作者名】

春谷公彦

### 【あらすじ】

趣味に生きる独身男性のお話？

「相変わらずきつたねえ部屋」「

久々に訪ねてきた友人の第一声がこれだ。

確かに一人暮らしの男の部屋らしく、物が散乱していて他人が見たら顔をしかめるだろうことは容易に想像していた。

だが、俺はそいつの苦情にも似た発言を無視した。冷蔵庫を開けたが、かろうじて二人分くらいの麦茶があつた。食器棚と呼ぶには役不足（誤用などを承知で使つて居る）の小さな棚から「ツブを取り出して注いだ。

「……何か薄くね？」

彼は顔をしかめた。

よく見ると確かに麦茶と呼ぶには少々色素が薄い。何故だろうと考へて、このパックを使うのは一度目だと思い出した。もつたいたかつたのだ。一番煎じとはこのことか。煎じていないから違うだろうか。

「さあ？ 俺はいつもそれで飲んでるから」「

俺がそう言うと友人は幽霊でも見たかのよつた目付きで俺を見た。余計なお世話だ。

「この部屋落ち着かねえな。片付けようぜ」

「お前は俺の彼女か。余計なお世話だ」

「そう言つなつて。俺の卒論覚えてるだろ？」「

「『お部屋片付けサポートシステムの考案』だつけ？」「

「そ。学生のときはプログラミングさつぱりだつたけど、就職して覚えたからさ。暇潰しに作つちゃつた」

彼はスマートフォン片手に言つた。

「そういうやうSE だつけ」

「そ、腕がなるなあ」

しかし、俺は記憶をさかのぼつて苦笑した。彼の実験に参加した

ことがあるが、彼の考案したシステムは片づけたいものを入力するとその片づけ方が出力されるというものだった。そのときはプログラミングを習得していなかつたので、彼自身が手動で入出力を行つていた。

しかし、机上の空論というか、部屋が汚い理由は十人十色なので、例外が多すぎて、結局、ゼミの先生にばれない程度に『まかして提出したものだつたはずだ。

だが、結局、片付けることになつた。

「お前、まだ野球やつてんの？ これ、草野球？」

彼は部屋の隅に干してあるゴーラフオームを指して言つた。最初からシステムは機能しなかつた。

「違えよ。クラブチームだよ。硬式だ」

「へえ。そろそろ非公式でいいんじゃね？ 体力的にもきつくなえ？」

俺は彼が本氣で言つているのか本氣で悩んだ。

「じゃあ、この辺の野球道具は捨てれないな。あれ？ グローブ何個もあんじやん」

「捨てんなよ。それぞれ思い入れがあるんだから」

「ときめくつてやつか」

「は？」

「知らねえの？ 最近のベストセラー。物を捨てる基準は『ときめくかどうか』ってやつ」

「その辺にときめかねえ穴あき靴下がいくつあるから捨ててくれ「自分でやれよー」

「この辺の本は？」

彼は床に散らかっている本を指差す。ジャンルは漫画か小説のどちらかだ。

「棚がもうねえ」

「整理しろよ。読まねえ本あるだろ」

「読まねえ本は一週間前に売った」

「いや、数冊売っただけだろ」

「半分くらい売ったかな？」

「……わかつた。売らなくていいから棚を買え」

仕方なく彼は本棚に入りきらなかつた本を棚の前に丁寧に積み上げていつた。

「何か物騒なタイトルが多いんだけど」

「ああ、全部ミステリーだからな」

「いつも思うんだけどさ、面白いの？」

「面白くないと読んでねえよ」

「そんなこと言つてつからモテないんだぜ？」

「そう言つて彼は肩をすくめた。余計なお世話だ。

「……面白いよ」俺は少し迷つて真面目に言つた。「思いもよらないトリック、それをちゃんとストーリーにして、さらにはトリックに偏らないで、物語を盛り上げる。どうやつたらそんな構成力が身につくのか。すげえ興味があるよ。それでなくても純粹に読んでいて楽しい。誰が犯人なのか、この先どうなるのか。そう考えながら読むのもいいし、何も考えずにストーリーに移入することもできる。……こんなところかな、ミステリーの魅力は」

「ふーん。仕事して、野球して、さらに本読む暇なんてあんのかよ？」

「なけりや、作る」

「うわつ、ギターまであるし。お前、ハイスペックだな」

「それは、もうしばらく弾いてない。スペックオーバーだった」

「じゃあ、捨てるだ」

「捨てんな」

「じゃあ、貰う」

「やりん」

「いいじゃねえか。ときめいてないだろ」

「そのときめきとか止める。氣色悪い」

結局、片づけたといつよりは、ゴミを捨てて、収納に入りきらなかつた物を整理したにすぎなかつた。俺の部屋にあるものは明らかに収納のスペックをオーバーしていた。

友人はしばらく他愛のない会話をしてのんびりしてから帰つていつた。

思ったよりも片付かなかつた、それでいていつもよりも整理された部屋は少し違和感があつた。

俺は窓際の机に座つた。夕日がまぶしかつたので、カーテンを閉めて部屋の電灯をつけた。

机の上にはノートパソコンが置いてあるが、何世代も前のものだ。それでいて、最近のソフトもインストールしているから、明らかにスペックオーバーだつた。

俺はワープロソフトを開いて、書きかけの小説を書き始めた。

小説を書き始めたのは最近だつた。ミステリーを読んでいくうちに自分でも書いてみたくなつた。ただそれだけだ。だが、その分、最近、ギターが弾けなくなつた。あまりに時間が足りなくなつたのだ。時間が足りなくなつて止めてしまつたものは他にも多い。ゲームなんてもう最近はやつていない。

明日は日曜日だ。野球の試合がある。朝に弱いタイプなので、あまり夜更かしできない。小説を書く時間は必然的に短くなる。

一時間ほどパソコンとにらめっこして、書くのを止めた。ふと携帯電話を見ると、先ほどの友人からメールが来ていた。

今日は楽しかつたぜ。

早く彼女作つて部屋の掃除してもらひなー！

俺は苦笑した。余計なお世話だ。

適当にメールを返信して。ベッドに倒れこんだ。  
「スペックオーバーだよ」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0499z/>

---

余計なお世話とスペックオーバー

2011年12月1日22時51分発行